

〈実践論文〉

自分の考えをもち、友達と関わりながら 考えを深めることのできる児童の育成 — 関わりを大切にしたい話し合い活動を通して —

榊原 浩子
愛知県半田市立板山小学校

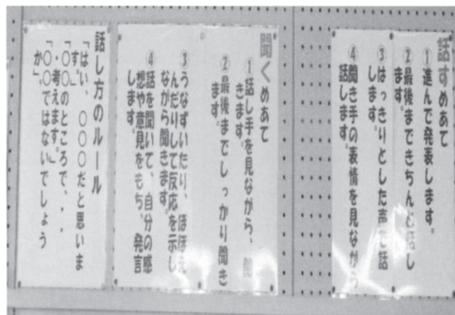
教育基本法第30条には、「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力を育み、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。」と示されている。つまり、表現力は課題解決をするために、思考力・判断力とともに、必要な能力であるとされている。また、中央審議会答申の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」（2008）に、「このような活動を各教科において行うことが、思考力・判断力・表現力等の育成にとって不可欠である。」とあり、「互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる。」とある。以上のことから、児童がお互いの考えを伝え合いながら、考えを深めていく活動を授業の中に取り入れ、自分たちの力で課題解決できる児童を育てたいと考えた。

[キーワード]話し合い活動・教育方法・ICT 機器・ワークシート・アクティブラーニング

I. 研究の構想

1. 研究の仮説

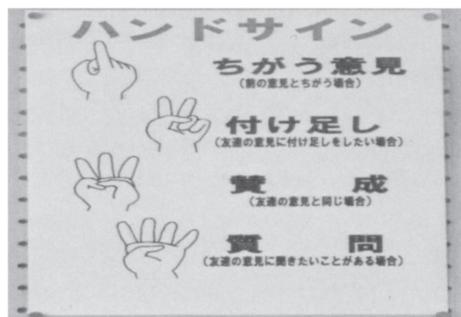
① 教師はまず、どんなことでも言い合える学級づくりを心がける。机の配置をコの字型にし話し合いのルール（話形、話始めの言葉、話し方、聞き方、ハンドサイン、相互指名など）を徹底する。ルールを生かしてペア、少人数グループ、学級全体による話し合いなどの活動を授業に多く取り入れることで、友達と関わりながら、自分の考えを深めることができるだろう。



（話し合いのルール）

② 話し合い活動を行う前に、教師は、児童にめあ

てに対する考えを必ず、もたせるようにする。そして、児童自身のその考えを友達に分かりやすく伝えるための手立てを講じた話し合い活動を行えば、自分の考えを深めることができるだろう。



（ハンドサイン）

③ 話し合い活動が終わった後、振り返りの時間（自分の考えをまとめる）を設けることで、自分の考えの深まりを知ることができるであろう。

2. 具体的な仮説

仮説①について

ルールを生かしたペア、少人数グループや全体による話し合い活動をしただけ多く授業に取り入

れることで、話し合いでの必要な言葉を知ることができる。例えば、仮定を言うときに使う「もし・・・なら」、例示をするために使う、「例えば・・・」、反対の考えを言うときに使う、「だけど・・・」普遍性を伝えるために使う「いつも・・・」などの言葉などである。（「ほめて育てる算数言葉～算数授業の言語活動を本当の思考力育成につなぐために～」より）これらの言葉やルールを身に付ければ、自分の考えと友達の考えの共通点や相違点などを知ることができる。また、児童が自分の考えに自信がない場合は「自信はありませんが・・・」や、発表の途中で、自分の考えが分からなくなってしまったときには、「分からなくなってしまいました」などの自分の気持ちも発表させることにする。そうすることで、聞き手であった児童が、困っている児童の思いに応えられる発言をすることも考えられる。

仮説②について

話し合い活動を行う前に、大切なことは自分の考えを必ずもつことである。その考えをノートやワークシートに書いて残すこと、考えている間に考えが変わっても、消さずに残しておくこと、考えたが途中まで、又は全く分からなかった考えでもいいことなどを指導する。その考えによっては、絵や図を使って表現できるようする。

自分の考えを分かりやすく伝えるためにプラズマテレビ、OHC、ICT機器、説明図、名簿、座席表を活用するなどの手立てを講じる。これらの手立てを講じた話し合い活動をしていく中で、児童は、自分の考えと友達の考えを比べ、同じ考えであることや全く違う反対の考えであることを知ったり、答えは同じであるが少し違うと感じたりすることができる。こうした活動の中で、自分にとって、よりよい考えや新しい考えを得て、自分の考えが更によりよい考えになったとき、自分の考えを「深めた」とした。

仮説③について

②、③の活動を通して、めあてに対する自分の考えがどうなったか、授業に対する感想や考えをまとめる、もう一度、自分の心に問いかけるために振り返りの場面が必要だと考える。この場面が自分の考えの深まりを知る上でとても大切である。

II. 研究の実践

1. 自分の考えをもつことの意味

児童は自分の考えを必ずノートやワークシートに書いて、残すようにした。ペア、少人数グループや全体での話し合いの際に、手元に自分の考えが書かれているノートやワークシートがあれば、それを使って説明ができるので、自分の考えを自信をもって発表できるという利点がある。そして、ここでもった考えが、授業の振り返りの場面で書く自分の考えと比較し、どのように変わったのかを知ることができる。教師は、児童一人一人が考えを深められるように考えを把握しておく大切である。

2. ペアや少人数グループによる話し合い活動

ペアや少人数グループによる話し合い活動を行うことで、お互いに自分の考えを伝え合うこと、そして自分の考えと比べて、同じところ、違うところなどを見つけることができた。自分の考えがあれば、安心して自分の考えを伝えようとする。聞いている友達も、自分の考えと比べながら、質問や同意見を示すハンドサインを出していた。すると「だから・・・ね。」と再度、説明することもあった。この活動を続けていくうちに児童は、自分の考えを友達にしっかり伝えることができるようになった。更に、自分の考えに自信のない児童は、この活動の中で自分と同じ考えをもっている友達がいることを知ることで、全体での話し合い活動に自信をもって参加できた。



(グループでの話し合い)

3. 全体での話し合い活動

全体での話し合い活動に入る前に、教師はそれぞれの児童がどのような意見をもっているか、机間巡視などでしっかり把握しておく。その上で、教師は本時のめあてに迫るために考えさせたい内容について、書いている児童をまず取り上げ、指名した。

その考えを聞き、他の児童は、その考えに対してのハンドサインを出し、そのハンドサインを見て、最初に指名された児童は、次の児童を指名するという相互指名をしながら授業を進めていった。教師は、指名されない児童の考えや発言をしている児童が、次の児童を指名するのに、どんな考えを知りたいのか、ハンドサインによって捉えることができた。児童も常に、友達のいろいろな考えと自分の考えを比較することができるので、考えを少しずつ深めることができた。また、相互指名を行っていくうちに、話し合いがめあてから外れそうになった場合、教師もハンドサインを出し、軌道修正するために必要な考えをもっている児童を指名することもあった。

4. 授業実践 1

単元名

5年 社会科「日本の国土と人々の暮らし」
(10 時間目 21 時間完了)

学習の目標

日本の川と外国の川を比べ、川の幅や流域の様子を知ることで日本の川の特徴を考え、表現することができる。

めあてと手立て

本時のめあて	日本の川の特徴を考えよう
手立て	○授業を行う1週間前に、外国の大きな川と日本の川の写真を見せ、違いを実感させることで意欲的に地図の表す意味を読み取ろうとする。また読み取ったことをわかりやすく伝えられるように家庭学習で根拠をノートにまとめる。それを教師が点検をする際、児童に説明させ、確かな読み取りができていないか確認する。そのことにより教師は、児童一人一人の考えが把握でき、児童は自信をもって根拠を明確にし、わかりやすく説明を行うことができるだろう。

授業の実際

「つかむ」の段階で、「板取川」「ナイル川」「アマゾン川」の3枚の写真を見せ、気付いたことを考えさせ、発表させた。「川幅がせまい。」「川が曲がっている」「流れが急」など気付いたことは何でも発表してもよいことにしたので、多くの児童が挙手し、発表することができた。「つかむ」の段階で、川幅や流域の様子などから、日本の川と外国の川の違いが分

かったことをもとに、「考える」段階では、日本の川の特徴について話し合わせた。自主勉強(家庭学習)で前もって「日本の川の特徴」について、地図帳だけを見て、児童一人一人に考えさせておいた。(「教科書は見ない」という条件をつけておく。)
「日本の川には、魚や鳥がいる」といった特徴の言葉の意味のわかっていないような内容で、ワークシートに書いていたA子。「利根川は太平洋に注ぐ川」と書いていたB子。どんな話し合いにどうなるのだろうと心配していた。

はじめにグループで話し合わせた。すると「日本の川は、外国の川と比べて短い。」や「利根川の流域面積は日本で一番広い。」などの考えが出された。なかなか「特徴」に結びにくいようだったので、それぞれの班のリーダーに『「日本の川は、外国の川と比べて・・・」という言葉でまとめるとどうなるか』と付箋に書いて渡し、グループで話すように指示した。その後、グループで話し合ったことをもとに、クラス全体で話し合った。分かりやすく、説明するためにOHCを使い、A男の考えをプラズマテレビに映し出し、説明させた。A男は等高線に目を向けていた。「日本の山は等高線の間がせまいから、山が急。そこに川が流れると川も急になる。世界の山は等高線が広いので山がなだらか。だから川もなだらか。」と地図を示しながら、発表した。友達の考えを聞いたり、質問したりする活動していくうちに、めあてに近づく児童もだんだん増えてきた。授業の最後に、日本の川の特徴について、自分の言葉でまとめさせた。するとA子は、「外国の川と比べて、日本の川は短く、流れが急。」と書き、B子は「川と地形と関係がある。山が急だから、川がすぐに流れてしまう。」とその児童なりにまとめることができていた。



(OHC、プラズマテレビを使っでの発表の様子)

5. 授業実践2

単元名

5年 算数科「面積」(4時間目 12時間完了)

学習の目標

四角形を三角形に分割する考えを用いて、四角形の面積を工夫して求める。

めあてと手立て

本時のめあて	四角形の面積の求め方を考えよう
手立て	○思考力、表現力を高めるために教室に「算数コーナー」を設け、このコーナーに必ず、次時の算数の授業のめあてを掲示する。児童はそのめあてについて、自分なりの考えを家庭学習(自主勉強)でまとめておく。分かりやすく伝えられるようにICTの利用(e黒板、使用ソフトはスクールプレゼンター、デジタルコンテンツ開発による自作資料)する。児童は自信をもって、根拠を明確にし、分かりやすく説明を行うことができるだろう。

学習の目標

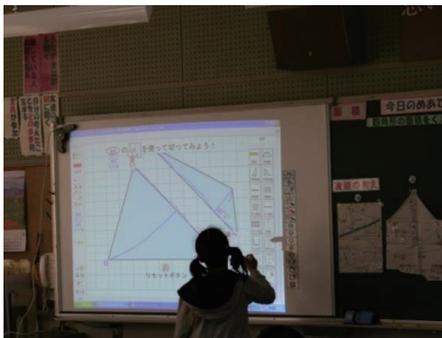
- ・いろいろな大きさの正三角形の個数について、友達の考えのよいところを見つけながら、意欲的に話し合おうとする。
- ・図の中の正三角形の個数について話しあう中で、話し合う中で、話し合いの仕方について知る。

めあてと手立て

本時のめあて	図の中に正三角形は何個あるかについて話し合おう
手立て	○自分の考えを発言できるようにまず、めあてに対する自分の考えをもたせ、その自分の考えをもって、グループ・学級全体の話し合いを行う。自分の考えと友達の考えを比べるときに、友達の考えの中に自分の考えと同じ言葉が使われてないか、同じ式、図を示してないかなど特に注意させる。そこから多くの考えが導き出させることができるだろう。

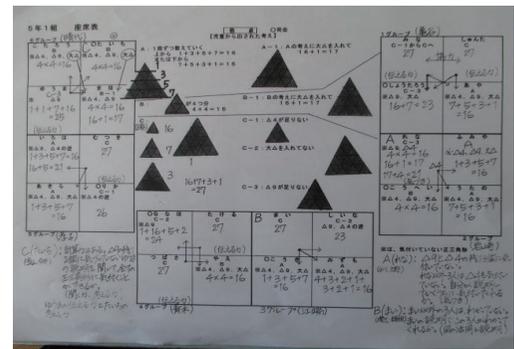
授業の実際

三角形の求積公式を活用して、四角形の面積を求める授業では、自分の考えをできるだけ、分かりやすく、視覚的にとらえさせるためにICTを利用した。ICTを利用することで、いろいろな考えがあることが分かり、友達の考えを視覚的にとらえることができた。



(授業の様子)

授業の実際



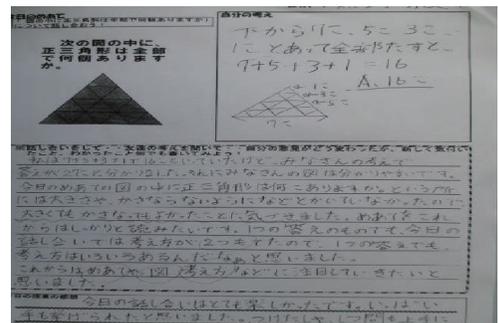
(それぞれの児童の考えが書かれている座席表)

6. 授業実践3

単元名

5年 算数科「みんなで話しあいましょう」

(1時間目 1時間完了)



(授業で使ったワークシート)

○グループでの話し合いの様子

このグループでの話し合いは、教師の予想通り、Y男がキーマンとなり、司会者のT男の考えを変えることができた。T男は、理解力もあるので、自分がかかれれば分かっているM子やK男にも丁寧に教えることができるだろうと思っていたが、その通りになった。Y男「みんな違う」という意見から、司会者のT男の言った「みんなで教えてみよう」と言葉から、もう一度、数えることから始めた。そのときに、Y男が正三角形9個分でも1個になることを言ったので、それから、正三角形を寄せ集めたものを数えてもいいことに気づき、正解へと導くことができた。4人の考えがそれぞれ違ったときの司会者T男の対応の仕方もよかったと思う。

	いことがわかった。
M子：	みんなの考えを聞くことでわかった。

○全体の話し合いの様子

全体での話し合いでは、児童が、グループでの話し合いの様子や上手に説明できなかった様子なども発言した。S男は、グループの話し合いで、M子が作ったとても分かりやすい説明図を使って説明したおかげで、分からなかった児童も理解できたことを発言した。K子は、小△しか、数えてなかったが、M子の説明を聞いて、理解できた。話し合いの後、K子のワークシートには、「M子の図はわかりやすいです・大きくても重なってもよかったことに気付きました・これからはめあてや図、考え方などを注目していきたいと思いました。」と書かれていた。話し合いをした後、自分の考えが変わったことをまとめていた。

6グループ (K男、T男、Y男、M子)

正解者なし。
T男は小さい△に気付いていない。Y男が△9の1つは気付いているので、そのことから、T男とY男が中心となって話し合っていくうちに全部の正三角形に気付けるか。M子、K男も全ての正三角形に気付けるか。

グループでの話し合いの様子 (司会：T男)

K男：	15こある。
M子：	$4 \times 4 = 16$
Y男：	$1 + 1 + 7 + 15 = 24$
M子：	$4 \times 4 = 16$ 、 $16 + 1 = 17$
Y男：	みんな、違うね。
T男：	みんなで数えてみよう。
全員：	賛成
M子：	21？
Y男：	27
T男：	27。Y男と同じです。どうですか？
K男・M子：	わからない。※T男→K男に説明 ※Y男→M子に説明
T男：	Y男の一番小さい三角形や9個の三角形を1つの三角形として数えることを教えてもらったから、意見が変わった。
K男：	T男に付け足しで、かぶってもい



(自分の考えを説明するM子)

7. 授業実践4

単元名

6年生 総合的な学習

「ふるさと 板山 再発見！そして 未来へ」

(18・19時間目 35時間完了)

学習の目標

- ・今までの活動について、自分の思いや考えを意欲的に発表する。 【実行する力】
- ・話し合い活動や友達の「ぜひ伝えたいPR活動」を通して、自分が「よもぎまつり」で伝えたいことを決めることができる。

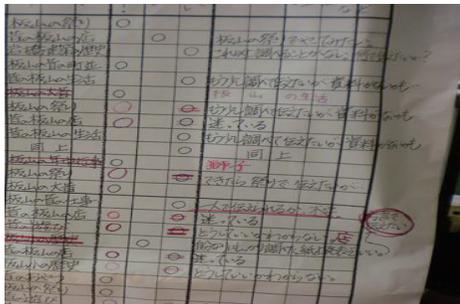
【考える力】【つながる力】

めあてと手立て

本時のめあて	今までの活動についてふりかえり、「よもぎまつり」で伝えたいことを決めよう！
手立て	○学年全員、児童それぞれのテーマに対しての思いや、「よもぎまつり」に向けて

の不安、迷い、心配などが書かれている名簿を見ながら、話し合い活動を行う。名簿に書かれて内容に対して、周りの友達はアドバイスや自分の考えを発言し合うことで、自分たちで解決できることができるだろう。また、「よもぎまつり」は、自分の決めたテーマで伝えたいが、仲間がほしいという児童は、「仲間集め隊」となり、PR活動を行う。この活動を行えば、「ふるさと板山」に伝わる「もの」「こと」が少しでも多くの人に伝えられるような「よもぎまつり」にすることができるだろう。

授業の実際



(それぞれの児童の思いが書かれている名簿)

○話し合い活動について

まず、17時間目が終わった時点で、自分のテーマに対して、それぞれの児童が抱えているその時の気持ちを調べ、それを名簿一覧にした。そして、その名簿を児童全員に配付した。すると、どの児童がどんなことで悩んでいるのか、何を思っているのかなどが明確になった。授業は、その悩んで友達に対しアドバイスするような意見が多く出された。そのアドバイスに耳を傾けることで、自分のテーマに対して自信がもてなかった児童は自信がもて、テーマをどうするのか迷っていた児童は、決定することもできた。また、悩んでいたことに対しても「こうするといいいんじゃないかな。」とアドバイスをもらったことで解決できた児童もいた。

○PR 活動について

この先、自分のテーマで活動していくのに「もっと仲間がほしい」と思っている児童もいたので「仲間集め」隊を結成し、PRも行った。この場で自分テーマに対するやりたいことや自分の思いを発表す

ることができ、その思いに賛同した友達が応援してくれることにもなった。

○授業の感想について

授業の最後に児童に感想を書かせた。「自分のテーマに対して不安に思っていることが解決できた。」という内容のものが多かった。しかし、その反面、「テーマに対して新たに迷いが出てしまった。」と書いている児童もいた。また、ある児童は資料の漢字が読めないことに不安をもっていた。友達から見ればたいしたことでは悩みでも、実は、本人にとっては大きな悩みであった。その悩みに対し、グループの友達が、言ってくれたアドバイスに対しての感想で「分からない漢字を教えてくれると言ってくれたことに感動した。自分のテーマで進めていく自信がついた。」と書いていた。

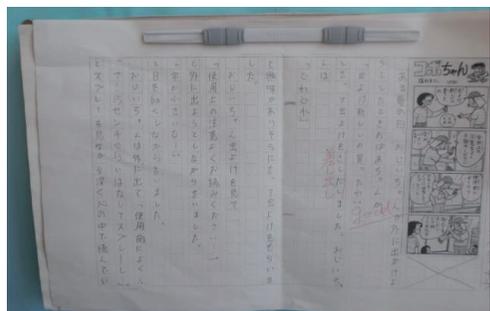
8. 書くことの重視

話し合い活動で大切なことは、一人一人が考えをもつことであると考え、その考えを書かせ、また振り返りの場面でも、話し合いの内容を頭の中でまとめながらも一度、めあてに対する自分の考えを書かせてきた。書くことは考えることであり、考えを表現することである。また、書いたことを発表することで、伝える活動の手助けにもなり、書くことで全員参加の授業になる。授業中の評価にノート・ワークシートや操作、発言など多様な方法を取り入れることで、児童の学習状況をより的確に把握し、適切な支援ができるように工夫した。

また、ノート・ワークシートや振り返りカードの記述、発言などを記録、蓄積、分析することによって思考力、表現力の変容をとらえるとともに、次時や次単元の指導に生かすようにした。

9. 書く力をつけるために日常的に行ってきた「コボちゃん」

書く力を付けるために、4コマ漫画の「コボちゃん」



ん」の1コマ1コマを自分なりに解釈し、話を原稿用紙にそれぞれの思いで書いていく、指導も行った。原稿用紙の使い方を習得でき、漫画の様子を見てどんな表現をするのがいいのかが考えられるようになり、文章量もだんだん増えていった。このことが、自分の感考えをノートやワークシートに書く場面や、授業の振り返りの場面でも生かされた。児童は、自分の考えをまとめること、書く文章量も増えたこと、また、自分の思ったことを文にすることにも慣れていった。

Ⅲ. 研究の成果と課題

1. 研究の成果

① 仮説①について

授業にペア、少人数グループ、学級全体での話し合いを多く取り入れることで、ハンドサインや相互指名などの話し合いのルールを児童に徹底することができた。また、話し合いのルールを身に付けた児童は、お互いの考えの共通点や相違点を考えながら話し合うことができるので、いろいろな考えや感じ方があることを知ったり、共感したりして、改めて考えることができた。つまり、考え方の幅を広げることができ、自分の考えを深めることもできた。

② 仮説②について

ノートやワークシートを活用して、児童自身の考えを書き、明確にしていくことが、考えを深めていく上でとても役に立った。その考えを友達に伝えるために、OHC、プラズマテレビ、ICT 機器などを使用することで、自分の考えをスムーズに具体的に分かりやすく伝えることができた。お互いの考えが分かるということが、自分の考えも深めることにもなった。

③ 仮説③について

授業の最後に振り返りの時間を設けることで、児童は行ってきた授業をもう一度思い出し、めあてに対して、じっくり向き合うことができた。じっくり向き合いながら、自分の考えを見直し、考えがどのように変わったのか、またなぜ変わらなかったのかなどをワークシートまとめた。この活動で、教師も児童も、考えの深まりを知ることができた。

2. 今後の課題

- ① 自分の考えをもち、友達と関わりながら考えを深めるために、話し合い活動は欠かせない。話し合い活動を活性化する上で、ペア、少人数グループでの話し合いは、有効である。そこで単元のどこに取り入れ、どんな学習展開の工夫をするのか、単元構成をもっと考えていく必要がある。
- ② 授業者として、考えたくなるような課題づくり、また話し合いを活性化させたり、深めたりするためのコーディネートの技術を磨いていく必要がある。

おわりに

2012年中央教育審議会に対する諮問では、小・中・高のアクティブラーニングを「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習」としている。また中教審答申では、学修（能動的学習）のことだとしている。具体的には、発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習、教室内のグループディスカッション、ディベート、グループワークなどを挙げている。

そこで、今回のこの研究の成果をアクティブラーニングに生かしていけるのではないかと考えている。

次は総合的な学習を軸として、アクティブラーニングを生かした研究を行っていきたいと考えている。

【引用および参考文献】

- 文部科学省 2008『小学校学習指導要領』東洋出版社
文部科学省 2008『小学校学習指導要領解説 国語編』ほか東洋館出版社
市川伸一 2007『教えて考えさせる授業（小学校）』図書文化
文部科学省 2008 中央審議会答申『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）』
文部科学省 2012 年中央教育審議会の報告書
田中博史、盛山隆雄「ほめて育てる算数言葉～算数授業の言語活動を本当の思考力育成につなぐために～」 文溪堂